

# 北海道女子短大1993年入学者の服装についての調査 ：着用実態と服装感および仕事に対する姿勢との関 連

著者	高岡 朋子，泉山 幸代，加藤 玲子
雑誌名	北海道女子短期大学研究紀要
巻	28
ページ	17-34
発行年	1993
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1136/00001605/">http://id.nii.ac.jp/1136/00001605/</a>

# 北海道女子短大1993年入学者の服装についての調査

—— 着用実態と服装感および仕事に対する姿勢との関連 ——

A Survey on Attire of Students Matriculated

in Hokkaido Women's Junior College in 1993

—— The Relationship Their Clothing Attitudes and

Their View on Career ——

高岡 朋子	泉山 幸代	加藤 玲子
Tomoko	TAKAOKA	Sachiyo
	IZUMIYAMA	Reiko
		KATO

## I 緒 言

服装はその人の印象形成に大きな役割を果たす。着用している服装によりその人柄が判断されたり、あるいは自己表現をするなど、服装は対人認知のための有効な手段になると共に、その時代の世相が反映するとも言われている。特に若年層のファッションはアパレル産業に大きな影響力を与え、服装社会の動向に関与している。筆者らは、'83年に入学者の服装に関する調査を行った。当時の服装社会は、高級志向でブランド品が出回り始めた時期であった。そのようなファッション背景の中で、常に周囲の人の服装に気をくばり、まわりの規範に従うという同調型の被服行動が得られた<sup>1)</sup>。10年後の今日、学生の服装感がどのように変化してきているのかを比較検討する目的で、入学式の服装や、日常着用している服装と服装感について、さらにライフスタイルの違いがどの程度、服装に現れるものなのかを探る意味で仕事に対する姿勢についても調査をした。結果いくつかの知見が得られたので報告する。

## II 調査方法

調査は1993年4月、学生1,210名、内訳は服飾美術科服飾コース（以下服飾コース）201名、服飾美術科家庭科学コース（以下家庭コース）159名、工芸美術科（以下工芸科）118名、保健体育科体育コース（以下体育コース）155名、保健体育科養護コース（以下養護コース）210名、初等教育学科（以下初等科）156名、経営情報学科（以下経情科）211名を対象に質問紙調査法により行った。

調査項目は、入学式に着用した洋服のSD法によるイメージ調査（23項目の形容詞対、5段階尺度）、式服の実態調査、服装感について（24項目、2件法）、日常着についての着用実態（22項目、5段階尺度）、働く目的と仕事の姿勢についてのほか、個人プロフィールである。

解析方法は単純集計のほかに、式服のイメージ調査および日常着については因子分析（主因

子法、バリマックス回転)と平均値の差の検定を、服装感については度数の差の検定を、働く目的と仕事の姿勢については平均値の差の検定、度数の差の検定による解析である。

### Ⅲ 結果および考察

#### 1. 入学式の式服についてのイメージ

短大に入学した学生が入学式の式服をどのようにとらえているのかを探るために、着用した服種および金額、色、さらに着用した時の気分や式服の活用方法などを質問し、10年前の調査と比較検討し考察を行なった。

学生が着用した式服について23個の形容詞対を使用し、SD法によりイメージの測定を行った結果の平均イメージプロフィールを図1に示す。上品な、落ち着いた、すっきりした、改まった、女らしい、新しいに高い評価がみられた。

つぎに各科ごとでイメージの相違を調べたところ、全科の平均イメージとの相違がみられた学科は、工芸科と体育コースであり、他学科については全科の平均値との相違はあまり認められなかった。

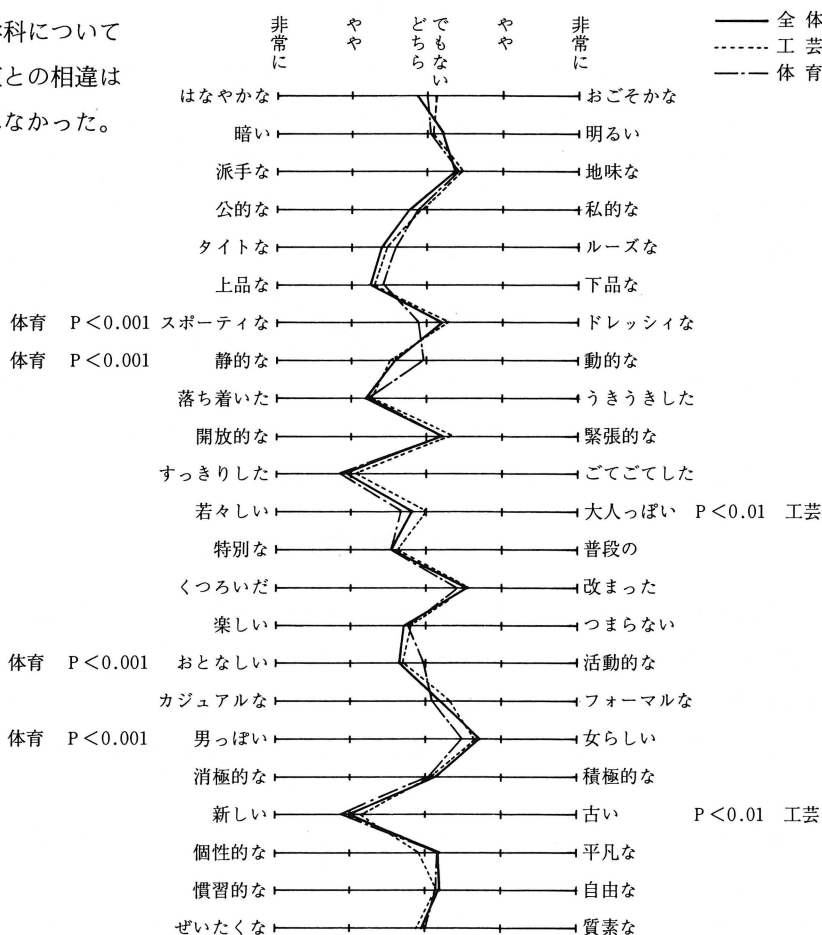


図1 入学式の式服についてのイメージプロフィール (平均評価点)

工芸科の特徴として、全科の平均評点と相違がみられた形容詞対を上げると、全体では若々しい(3.23), 平凡な(2.87), 新しい(4.06)であったのにたいして、工芸科は大人っぽい(2.99), 個性的な(3.01), 新しい(3.84)であり、全科と工芸科の平均評点の差に対してt検定を行ったところ、大人っぽい, 新しいに危険率1%以上で有意差がみられた。このことから、工芸科の学生は式服を大人っぽくとらえていることが判明した。また同様に体育コースの特徴として、危険率0.1%で有意差が認められた形容詞対を上げると、全科がドレッシィな(2.81), 静的な(3.42), おとなしい(3.34), 女らしい(2.26)であったのにたいして体育コースは、スポーティな(3.42), 静的な(3.08)とやや動的方向に、おとなしいを(3.06)と活動的方向に、女らしいを(2.52)とやや男っぽい方向にとらえていた。これらのことから、体育コースの学生はスポーティで活動的な雰囲気 of 式服を着用していたものと思われた。

つぎに23項目の形容詞対を変数に、各個人の評定から主因子法による因子分析を試み因子の抽出を行った。バリマックス回転後の因子行列を表1に示す。5因子までの累積寄与率は48.45%であり、第1因子を上品な因子, 2因子を落ち着き性の因子, 3因子をフォーマル性の因子, 4因子を平凡な因子, 5因子を慣習的な因子と解釈した。なお6因子以降は1項目の

表1 式服にたいするイメージの因子分析結果

項	目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6	因子7	因子8
静的な	— 動的な	0.77	-0.13	-0.09	-0.15	0.17	0.03	0.01	0.02
男っぽい	— 女らしい	-0.69	-0.21	0.21	-0.16	0.04	-0.04	-0.06	0.05
おとなしい	— 活動的な	0.69	-0.20	-0.10	-0.33	0.15	0.04	0.00	0.01
スポーティな	— ドレッシィな	-0.64	-0.12	0.36	-0.03	0.22	0.05	0.07	-0.08
上品な	— 下品な	0.46	-0.02	-0.13	0.41	0.37	0.15	-0.04	-0.21
暗い	— 明るい	-0.03	-0.81	-0.02	-0.02	0.09	-0.14	0.05	0.02
派手な	— 地味な	-0.05	0.72	0.05	0.19	-0.04	-0.22	-0.18	-0.02
はなやかな	— おごそかな	0.02	0.70	0.10	0.23	-0.05	-0.16	-0.13	-0.04
落ち着いた	— うきうきした	0.40	-0.54	0.00	-0.03	0.31	0.23	-0.13	0.01
若々しい	— 大人っぽい	-0.14	0.43	0.23	-0.13	-0.02	0.10	0.34	-0.52
くつろいだ	— 改まった	-0.20	0.11	0.77	0.08	-0.19	-0.10	0.03	-0.01
特別な	— 普段の	0.11	0.07	-0.76	0.09	-0.01	-0.07	-0.10	-0.11
開放的な	— 緊張的な	-0.21	0.28	0.54	0.20	-0.27	-0.01	-0.04	0.08
カジュアルな	— フォーマルな	-0.42	0.15	0.51	0.07	-0.04	-0.09	0.13	-0.20
消極的な	— 積極的な	0.29	-0.23	-0.02	-0.69	0.05	-0.01	0.03	-0.07
個性的な	— 平凡な	0.04	0.08	0.10	0.55	-0.25	-0.19	-0.32	-0.27
楽しい	— つまらない	-0.05	0.39	-0.01	0.52	-0.25	0.07	0.03	-0.24
公的な	— 私的な	0.06	-0.13	-0.07	-0.15	0.75	0.05	0.01	0.05
慣習的な	— 自由な	0.03	-0.13	-0.15	-0.41	0.59	-0.07	0.03	0.05
タイトな	— ルーズな	0.14	-0.05	-0.31	0.26	0.54	0.24	0.04	0.12
すっきりした	— ごてごてした	0.04	-0.06	-0.03	0.00	0.05	0.94	-0.01	-0.06
ぜいたくな	— 質素な	-0.01	0.13	-0.08	0.04	-0.01	0.03	-0.89	-0.10
新しい	— 古い	0.02	-0.02	-0.12	0.12	-0.06	0.07	-0.23	-0.79
寄 与 率 (%)		11.87	11.47	9.37	7.91	7.83	5.18	5.08	5.07
累 積 寄 与 率 (%)		11.87	23.34	32.71	40.62	48.45	53.63	58.71	63.78



みの因子であり因子としての解釈は出来なかった。

以上の結果から、入学式の式服は、上品で落ち着いたもの、かつフォーマル性があり慣習的で平凡なイメージを持っていることが判明した。また体育コースの学生は他学科の学生よりも、スポーティで活動的な雰囲気<sup>1)</sup>の式服を着用しているものと思われた。

## 2. 式服として着用した服種と色について

式服として着用した

表2 入学式に着用した服種と金額

服種と金額を表2に示す。	着用人数(%)	最低金額(円)	最高金額(円)	平均金額(円)
服種はスーツ、ブレザーとスカート、パンツの組合せが多く、アクセサリとしてはイヤリング、ペンダント、スカーフ、髪かざりなどをつけていた。	991 (82.0)	3,000	100,000	35,500
スーツの平均金額は35,500円、ブレザー27,700円、スカート16,190円、パンツ18,100円であった。	56 (4.6)	2,900	60,000	23,120
10年前も式服としてス	154 (12.7)	3,000	50,000	27,700
ーツが多く、その購入金額は2万から4万の間であり、当時の勤労者一世帯当りの被服費(17,584円)の1～2ヵ月分をにかけていた。 <sup>1)</sup>	167 (13.8)	1,500	75,000	16,190
	129 (10.7)	1,500	97,000	18,100
	13 (1.1)	1,000	39,000	9,440
	86 (7.1)	300	40,000	6,310
	181 (15.0)	500	15,000	3,480
	57 (4.7)	1,000	10,000	3,220
	18 (1.5)	1,200	8,000	3,230
	17 (1.4)	1,000	30,000	6,940
	188 (15.5)	200	120,000	8,700
	153 (12.6)	100	10,000	971
	283 (23.4)	300	23,000	4,610
	1,023 (84.5)	1,000	49,000	8,200
	879 (72.6)	1,000	180,000	13,400

(注) 平均金額は記入数で割ったもの

ツが多く、その購入金額は2万から4万の間であり、当時の勤労者一世帯当りの被服費(17,584円)の1～2ヵ月分をにかけていた。<sup>1)</sup>

’92年の家計調査を参照すると北海道における勤労者一世帯当りの1ヵ月間の被服費は24,191円であり、<sup>2)</sup>スーツの平均購入額は35,500円とこの被服費の2ヵ月分はかかっていなかった。一世帯あたりの被服費は10年間で37.6%上昇した割には、スーツの購入金額は上昇していない。さらにスーツの購入金額の最低と最高金額の幅が広い。これらのことは、アパレル産業が消費者のニーズに応じて、多様化していることを現していると言えよう。

つぎに、衣服の印象形成に大きな役割を果たすものとして、色の存在が上げられる。色は様々な感情を抱かせるものである。学生が式服として多く着用していた服種、すなわちスーツ、ブレザー、スカートを取り出し、この服種の色を出現率の高い順に示す。結果は表3である。服種による相違はみられず一番多く抽出された色は紺、2位はグレーであった。3位以下は服種によって違いがみられスーツはピンク、ベージュ、水色と淡い色がつづき春らしい季節感があった。ブレザーはベージュ、チェック、黒、スカートはベージュ、黒、チェックであり黒とチェックの出現順が変わっただけであった。前回の調査でも<sup>1)</sup>スーツの色にグレー、紺が多く、式服の色として紺、グレー、は定番色と言えよう。また10年前は、スーツに黒が66名と3位であった

表3 入学式に着用した式服の色

科別		服 飾		家 庭		工 芸		体 育	
順位		色	人数(%)	色	人数(%)	色	人数(%)	色	人数(%)
ス ー ツ	1位	グレー	37(18.4)	グレー	34(21.4)	紺	22(18.6)	紺	41(26.5)
	2位	紺	37(18.4)	紺	34(21.4)	グレー	21( 7.8)	グレー	26(16.8)
	3位	ピンク	19( 9.5)	ピンク	11( 6.9)	黒	6( 5.1)	ピンク	9( 5.8)
	4位	黒	11( 5.5)	水色	8( 5.0)	ベージュ	6( 5.1)	ベージュ	9( 5.8)
	5位	ベージュ	11( 5.5)	黒	7( 4.4)	水色	6( 5.1)	黒	5( 3.2)
ブ レ ザ ー	1位	紺	7( 3.5)	紺	9( 5.7)	紺	9( 7.6)	紺	16(10.3)
	2位	グレー	5( 2.5)	グレー	5( 3.1)	グレー	5( 4.2)	グレー	7( 4.5)
	3位	ベージュ	4( 2.0)	ベージュ	2( 1.3)	ピンク	1( 0.8)	茶	2( 1.3)
	4位	ピンク	2( 1.0)	チェック	2( 1.3)	黒	1( 0.8)	チェック	1( 0.6)
	5位	チェック	2( 1.0)	黒	1( 0.6)	水色	1( 0.8)		
ス カ ー ト	1位	紺	9( 4.5)	紺	9( 5.7)	グレー	5( 4.2)	紺	16(10.3)
	2位	グレー	5( 2.5)	グレー	5( 3.1)	紺	4( 3.4)	グレー	11( 7.1)
	3位	ベージュ	5( 2.5)	黒	3( 1.9)	黒	3( 2.5)	ベージュ	1( 0.6)
	4位	ピンク	2( 1.0)	ベージュ	3( 1.9)	水色	3( 2.5)	水色	1( 0.6)
	5位	水色	1( 0.5)	ピンク	2( 1.3)	ピンク	1( 0.8)	茶	1( 0.6)
科別		養 護		初 等		経 情		全 体	
順位		色	人数(%)	色	人数(%)	色	人数(%)	色	人数(%)
ス ー ツ	1位	紺	45(21.4)	紺	37(23.7)	紺	42(19.9)	紺	258(15.0)
	2位	グレー	35(16.7)	グレー	24(15.4)	グレー	41(19.4)	グレー	218(12.6)
	3位	水色	18(11.5)	ピンク	18(11.5)	水色	20( 9.5)	ピンク	86( 7.7)
	4位	ベージュ	19( 9.0)	ベージュ	14( 9.0)	ピンク	12( 5.7)	ベージュ	77( 4.4)
	5位	ピンク	13( 6.2)	水色	9( 5.8)	ベージュ	11( 5.2)	水色	74( 4.2)
ブ レ ザ ー	1位	紺	8( 3.8)	紺	8( 5.1)	紺	14( 6.6)	紺	71( 4.3)
	2位	グレー	6( 2.9)	グレー	6( 3.8)	ベージュ	2( 0.9)	グレー	35( 2.2)
	3位	チェック	3( 1.4)	ベージュ	2( 1.3)	グレー	1( 0.5)	ベージュ	12( 0.7)
	4位	ベージュ	2( 1.0)	黒	1( 0.6)	水色	1( 0.5)	チェック	7( 0.4)
	5位	黒	1( 0.5)					黒	6( 0.4)
ス カ ー ト	1位	紺	7( 3.3)	紺	7( 4.5)	紺	9( 4.3)	紺	61( 3.6)
	2位	グレー	6( 2.9)	グレー	4( 2.6)	ベージュ	2( 0.9)	グレー	37( 2.3)
	3位	ベージュ	1( 0.5)	ベージュ	3( 1.9)	グレー	1( 0.5)	ベージュ	15( 0.8)
	4位	茶	1( 0.5)	チェック	3( 1.9)	チェック	1( 0.5)	黒	11( 0.7)
	5位	ブルーグレー	1( 0.5)	黒	2( 1.3)	ブルーグレー	1( 0.5)	チェック	9( 0.5)

のが、今回は48名とやや少なくなっている。ふだん着用する洋服の色では黒が好まれている割には、スーツとしての黒の着用は少なかった。

学生に好まれる洋服の色を表4に示すと黒が1位で、次に白、紺、青、グレーの順であり、調和感を得やすい色、すなわち“あわせやすい”<sup>3)4)</sup>色を着用していた。近年、黒、白、グレー系の無彩色は若年層に好まれる傾向にある。女子学生を対象に無彩色の持つ色彩感情効果を調査した多久らは、白色は楽しさや若々しさ、スポーティなどの活動的に評価できる因子を、黒色は濃厚で暗い力量性の因子と都会的オシャレ、優雅さなどの洗練性の因子を抽出していた。学生が黒、白を着用するのは、配色しやすい色として、また黒色は暗いけれどもオシャレで大人

表4 好んで着る洋服の色

(複数回答)

科別 順位	服飾 色 人数	家庭 色 人数	工芸 色 人数	体育 色 人数	養護 色 人数	初等 色 人数	経情 色 人数	全体 色 人数
1位	黒 124	黒 80	黒 62	白 70	黒 104	白 62	黒 103	黒 473
2位	白 76	白 64	青 42	黒 68	白 93	黒 55	白 80	白 445
3位	青 62	グレー 54	白 41	グレー 58	グレー 85	紺 53	紺 68	紺 380
4位	グレー 58	紺 51	グレー 37	紺 57	紺 71	青 53	グレー 64	青 356
5位	紺 53	青 40	紺 27	青 32	青 66	グレー 46	青 61	グレー 271

のムードを表現する色として、白色は若さを表現する色として好んでいると思われる。

また外靴の色は49.0%が黒色、茶色が14.6%で、この平均購入金額は8,200円であった。持ち物としてバッグの色は黒色が25.5%、茶色が29.0%で、平均購入金額は13,400円であった。バッグ、靴ともに無難な色を選んでおり、購入時に式服との組合せを考えたのではなく、普段にも使用出来るものとして購入していたと言える。

さらに髪の高さを調査した結果ロング26.7%、セミロング51.7%、ショート21.7%でありロング、セミロング合わせると78.4%と髪はロング傾向であり、髪飾りは約12.6%の人がつけていた。学生の主観的判断で自分の顔型を選んでもらったところ、丸型39.4%、卵型39.6%と卵型がやや多かった。

以上の結果から入学式でみられた平均的な着想像はつぎのようになった。髪型はセミロング、イヤリングをつけ卵型の顔立ち、洋服は紺色のスーツを着用、バッグは茶色、靴は黒色であった。

### 3. 入学式の洋服を着用した時の気分と活用方法

洋服を替える時そこには何らかの心理的な作用が伴うものであるが入学式に望むにあたり式服を着用したときの気分を質問した。その結果を表5に示すと、引き締まった気分が35.8%、つぎに大人になったような気分が28.3%、晴れやかな気分が15.5%であった。引き締まった気分がしたがが多く、式服のイメージプロフィールで、“緊張的な”と“改まった”に位置していたことと類似がみられた。さらに着用していた洋服はスーツが多いことから、スーツは着用者にある程度の緊張感や改まりの雰囲気を与える服種と思われた。

また今後の式服の活用方法を表6に示すと、街着、冠婚葬祭用の式服、就職時のリクルートスーツとしてが多く、改まった時の外出着として用いるものと思われる。通学服や卒業時の式服としての活用は少なかった。通学時にはカジュアルな服装を、また卒業時には近年の傾向から和服を着用するつもりと考えられた。

つぎに洋服を購入する場所はほとんどの学生はデパート(818名)、ブティック(170名)であり、手作り(3名)やオーダーサロンはいなかった。

### 4. 入学生服装感についての考察

18歳である入学生がどのような服装感を持っているものなのか、また10年前と比較した時にこ

表5 入学式の式服を着用した時の気分 (%)

項 目 / 各科コース	服 飾	家 庭	工 芸	体 育
大人になったような気分になった	49( 24.4)	52( 33.3)	27( 22.9)	37( 23.9)
晴やかな気分になった	39( 19.4)	28( 17.9)	18( 15.3)	21( 13.5)
厳肅な気分になった	2( 1.0)	4( 2.6)	5( 4.2)	7( 4.5)
自由な気分になった	3( 1.5)	1( 0.6)	3( 2.5)	2( 1.3)
引き締まった気分になった	68( 33.8)	53( 34.0)	34( 28.8)	63( 40.6)
窮屈な気分になった	9( 4.5)	4( 2.6)	7( 5.9)	3( 1.9)
ふだんとかわりがなかった	26( 12.9)	14( 9.0)	21( 17.8)	21( 13.5)
その他	5( 2.5)	0( 0)	3( 2.5)	1( 0.6)
計	201(100.0)	156(100.0)	118(100.0)	155(100.0)

項 目 / 各科コース	養 護	初 等	経 情	合 計
大人になったような気分になった	65( 31.1)	58( 37.2)	54( 37.2)	342( 28.3)
晴やかな気分になった	30( 14.3)	21( 13.5)	31( 14.7)	188( 15.6)
厳肅な気分になった	9( 4.3)	3( 1.9)	7( 3.3)	37( 3.1)
自由な気分になった	2( 1.0)	0( 0)	0( 0)	11( 0.9)
引き締まった気分になった	73( 34.8)	51( 32.7)	91( 43.1)	433( 35.9)
窮屈な気分になった	10( 4.8)	11( 7.1)	3( 1.4)	47( 3.9)
ふだんとかわりがなかった	18( 8.6)	12( 7.7)	24( 11.4)	136( 11.3)
その他	3( 1.4)	0( 0)	1( 0.5)	13( 1.1)
計	210(100.0)	156(100.0)	211(100.0)	1,207(100.0)

表6 入学式に着用した洋服の活用方法 (%)

項 目 / 各科コース	服 飾	家 庭	工 芸	体 育
通学服として	41( 20.4)	28( 17.9)	13( 11.0)	16( 10.3)
街着として	68( 33.8)	46( 29.5)	40( 33.9)	42( 27.1)
冠婚葬祭用の式服として	41( 20.4)	41( 26.3)	26( 22.0)	39( 25.2)
就職時の会社訪問用のリクルートスーツとして	29( 14.4)	24( 15.4)	22( 18.6)	40( 25.8)
卒業式の式服として	0( 0)	0( 0)	1( 0.8)	2( 1.3)
その他 (着ない)	22( 10.9)	17( 10.7)	16( 13.6)	16( 10.3)
計	201(100.0)	156(100.0)	118(100.0)	155(100.0)

項 目 / 各科コース	養 護	初 等	経 情	合 計
通学服として	34( 16.2)	17( 10.9)	40( 19.0)	189( 15.7)
街着として	59( 28.1)	42( 26.9)	60( 28.4)	357( 29.6)
冠婚葬祭用の式服として	53( 25.2)	41( 26.3)	44( 20.9)	285( 23.6)
就職時の会社訪問用のリクルートスーツとして	30( 14.3)	28( 17.9)	43( 20.4)	216( 17.9)
卒業式の式服として	2( 1.0)	2( 1.3)	4( 1.9)	11( 0.9)
その他 (着ない)	32( 15.2)	26( 16.7)	20( 9.5)	149( 12.3)
計	210(100.0)	156(100.0)	211(100.0)	1,207(100.0)

の服装感がどの程度に変化しているものなのか、“あてはまる”“あてはまらない”の2件法で質問をした。本来、因子分析は数量データや距離尺度に用いるものであり、2件法であるカテゴリー尺度には使用出来ないものであるが、考察にあたり概念分けをすることを考え、服装感の質問24項目に対する回答を変数に因子分析を試みた。結果、質問項目(12, 15, 21)を独自型、(1, 3, 8, 22)を同調型、(4, 7, 14, 11)を目立ち型、(19, 9, 10)を堅実型、(16,

6) を流行型, (20, 17, 18, 23) を購入態度として, 概念分けをして考察することにした。また (2, 5, 13, 24) の項目は概念に該当しない質問項目であった。

結果を表7に示すと, 被験者が半数以上“あてはまる”とした項目は, 購入態度に関する項目であった。洋服購入時には, 母親と友人と一緒に行きアドバイスを受けるが, 購入の決定は自分です。また手持ちのものを考え, 気に入るものがあるまで徹底的に捜し, 多少高価であっても長年着られるものを購入するなど合理的な衣生活をこころがけていることが推察された。さらに, 自分に似合った服装であれば流行遅れであっても着用, 購入しても多くの人が着用していると着ないなど, 自分なりの着用方法を身につけていることもわかった。

つぎに服装の概念にたいして否定的であった項目, すなわち“あてはまらない”とした項目は, 服装にお金をかけることは無駄なことだと思う, と目立ち型, 流行型の各項目であった。

自分の存在を服装で主張しない, 目立つ服装はしない, 洋服のセンスには自信がない, 流行の服はすぐには取り入れないなどから, 流行率先型ではないが, 服装にお金をかけることは無駄なこととは思っていないことで, おしゃれにある程度の関心を持っているものと思われる。また同調型の各質問にたいしても半数以上が“あてはまらない”としており, 非同調傾向が認められた。

表7 入学生の服装感

(%)

	項 目 /	全体 N=1,209	
		1 あてはまる	2 あてはまらない
独自型	12. 購入しても多くの人が着ているのがわかると着るのが嫌になる	647 (53.5)	562 (46.5)
	15. 今までに誰も着用したことのない洋服を着たい	496 (41.0)	713 (59.0)
	21. 洋服を購入するときは他人が着ていないものを選ぶ	570 (47.1)	639 (52.9)
同調型	1. 周囲の人と同じ服装をしていると落ち着く	502 (41.5)	707 (58.5)
	3. 自分の好みでなくとも, 他人にほめられたら着る	427 (35.3)	782 (64.7)
	8. 友達が着ている洋服と同じものが欲しくなる	457 (37.8)	752 (62.2)
	22. 洋服を購入するとき友人や店員に進められるとその気になって買う	440 (36.4)	769 (63.6)
目立ち型	7. 自分の存在を服装で主張する方である	257 (21.3)	952 (78.7)
	14. 周囲の人をアッといわせるような目立つ服装をする	78 (6.5)	1,131 (93.5)
	4. 洋服のセンスには自信がある	284 (23.5)	925 (76.5)
	11. 自分はどんな格好をしてもよく似合うと思う	83 (6.9)	1,126 (93.1)
堅実型	19. 洋服を購入するときよいと思ったらすぐ買う	665 (55.1)	543 (44.9)
	9. ブランド商品はぜいたくだと思う	583 (48.2)	626 (51.8)
	10. 服装にお金をかけることは無駄なことだと思う	113 (9.3)	1,096 (90.7)
流行型	16. 流行の服は真っ先に取り入れる	164 (13.6)	1,045 (86.4)
	6. ブランドやメーカーにこだわるほうである	298 (24.6)	911 (75.4)
購入態度	20. 洋服を購入するとき友人や母親と一緒に行く	855 (70.7)	354 (29.3)
	17. 洋服を購入するとき自分一人で決めて購入する	690 (57.1)	519 (42.9)
	18. 洋服を購入するとき, 気に入るものがあるまで徹底的に捜して買う	982 (81.2)	227 (18.8)
	23. 洋服を購入するときは手持ちのものを考えてから購入する	1,113 (92.1)	96 (7.9)
その他の項目	2. プレゼントされた洋服は多少気にいらなくても着る	783 (61.8)	426 (35.2)
	5. 自分に似合った服装であれば流行遅れであっても着る	853 (70.6)	356 (29.4)
	13. リサイクルなどで安価な洋服を見つけて買う	431 (35.6)	778 (64.4)
	24. 洋服を購入するときは多少高価であっても, 長年着られるものを買う	885 (73.2)	324 (26.8)

さらに各科コースごとの特徴と概念の傾向を探るために、各概念ごとにその傾向の強い人と弱い人、すなわち各概念の全ての質問項目に“あてはまる”とした人と、“あてはまらない”とした人を抽出した。ただし堅実型の洋服の購入時に良いと思ったらすぐ買うという質問項目については、概念分けをした時の因子負荷量がマイナスであったため、“あてはまる”と“あてはまらない”を入れ換えた。同調型、独自型、流行型とも $\chi^2$ の検定結果、危険率5%以上で有意差がみられその結果を表8に示す。なお、堅実型、目だち型にたいしては、各科ごとのあてはまる人数が少ないことで、検定は行わなかった。同調型にたいしては“あてはまらない”とする非同調型が多く、服飾コースと経情科の学生が非同調的であった。次に独自型の概念に肯定的であったのは服飾コース、工芸科であり、独自型に否定的であったのは初等科、養護コースの学生であった。流行型には学生の多くが否定的であるが、中でも経情科の学生に強い傾向が認められ、入学生の多くはブランドやメーカーにはこだわっていないことが判明した。昨今の渋谷ファッション（渋谷カジュアルファッション）に代表されるように団塊の世代の子供達はブランドブームの火を消した<sup>8)</sup>と言われており、北海道の学生にとっても、ブランド品はもはや魅力のあるものではなくなっていると推察される。

表8 入学生の服装感についての検定結果

(%)

	肯定 否定/各科	服飾 N=201	家庭 N=158	工芸 N=118	体育 N=155	養護 N=210	初等 N=156	経情 N=211	合計 N=1,209	カイ自乗結果
同調型	あてはまる	10 (5.0)	13 (8.3)	4 (3.4)	9 (5.8)	18 (8.6)	14 (9.0)	20 (9.5)	88 (7.3)	$\chi^2=14.093$ $p<0.05$
	あてはまらない	78 (38.8)	35 (22.2)	31 (26.3)	35 (22.6)	39 (18.6)	33 (21.2)	58 (27.5)	309 (25.6)	
独自型	あてはまる	56 (27.9)	29 (18.4)	27 (22.9)	33 (21.3)	30 (14.3)	22 (14.1)	28 (13.3)	225 (18.6)	$\chi^2=33.389$ $p<0.001$
	あてはまらない	26 (12.9)	37 (23.4)	24 (20.3)	38 (24.5)	61 (29.0)	48 (30.8)	53 (25.1)	287 (23.7)	
流行型	あてはまる	19 (9.5)	19 (12.0)	8 (6.8)	11 (7.1)	8 (3.9)	8 (5.1)	11 (5.2)	84 (6.9)	$\chi^2=15.726$ $p<0.05$
	あてはまらない	120 (59.7)	103 (65.2)	78 (66.1)	96 (61.9)	146 (69.5)	121 (77.6)	167 (79.1)	831 (68.7)	

10年前はバブル景気の始まり、ブランドブーム<sup>8)</sup>現象が現れていた社会であった。前回の服装感に関する調査では、ブランド品を高級で贅沢としながらも、スポーツウェアを購入する際にはメーカー品を選びたい、流行の採用時期では多数の人が「周りの人が取りいれてから」などと、服装にたいしてやや同調傾向が認められた。10年後の今日、ファッションに対する情報が増加、多様化しており、その中での非同調型の服装感が得られたことから、10年前より学生達はやや個性化現象に動いていると言えよう。

以上の結果、入学生の服装感として非同調型、非流行型の概念が得られたことにより服装感是非同調的、非流行的傾向であると言えよう。さらに購入態度から合理的な衣生活を心がけ、自分なりの着用方法を身につけており、個性化現象に動いていることが推察された。また、各

科コースごとの特徴として、服飾コースは、非同調・独自の、工芸科は独自の、養護コース、初等科は非独自の、経情科は非同調・非流行的な傾向が認められた。

### 5. 日常着用している洋服についての考察

洋服はTPOに応じて着装されるものであるが、日常学生達はどのような衣服を好みどのような衣服を着用しているものなのか、“非常にそう思う”から“全く思わない”の5段階尺度で質問をした。平均評点の高い項目を上げると、ジーンズやパンツをよく着る(4.4)、ラフなスタイルをする(4.1)、ゆったりした動きやすい服装が多い(3.9)で、評点の低い項目はレースのついたブラウス(1.4)、フリルやリボンのついた洋服(1.5)であった。以上の結果から、学生は日常着としてはTシャツやジーンズなどスポーティでラフなスタイルをしており、レースやフリル、リボンなどのドレッシィな雰囲気のする洋服はあまり着用していないことが判明した。

つぎに22項目の質問項目を変数に、1,209名の被験者を観測回数にして、各個人の相関係数行列を算出し、日常着用している洋服のタイプ分けをする目的で因子分析を試みた。結果を表9に示す。因子の解釈をしやすいようにバリマックス回転を行ったところ、固有値1.0以上で

表9 日常着用している洋服の因子分析結果

項 目 / 因 子	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6
スポーティな洋服を着るほうである	-0.75	-0.12	-0.08	0.02	0.10	-0.04
Tシャツ(トレーナー)とジーンズの組合せを着用することが多い	-0.71	-0.14	-0.16	-0.01	-0.07	-0.06
ジーンズやパンツをよく着るほうである	-0.70	-0.24	-0.20	0.03	0.02	-0.02
ラフなスタイルをするほうである	-0.66	-0.16	-0.18	0.07	0.17	0.18
ボーイッシュな雰囲気の洋服を着ることが多い	-0.58	-0.12	-0.17	-0.16	0.10	0.02
ゆったりした動きやすい服装が多い	-0.55	-0.04	-0.21	0.11	-0.02	0.26
フリルやリボンのついた洋服を着用するほうである	0.18	0.76	-0.01	-0.07	-0.06	0.04
可愛らしい洋服を着ることが多い	0.21	0.74	0.17	-0.04	-0.03	0.17
レースのついたブラウスを着るほうである	0.12	0.69	0.01	-0.08	-0.19	-0.05
花柄や水玉などの曲線的な模様の洋服を着る方である	0.08	0.55	0.16	0.02	-0.27	-0.20
ミニスカートをよく着るほうである	0.31	0.14	0.77	0.03	0.13	-0.02
タイトスカートをよく着用するほうである	0.09	-0.04	0.70	-0.03	-0.34	-0.00
スカートはほとんど着用しない	-0.37	-0.10	-0.66	0.02	0.18	-0.09
キュロットスカートやショートパンツをよく着用するほうである	-0.10	0.21	0.40	0.31	0.31	0.06
自分の好みの洋服は人と違うような気がする	0.07	0.00	-0.08	-0.78	-0.02	0.06
どこかに飾りがあるなど、凝ったデザインの洋服が好きなほうである	0.02	0.33	0.16	-0.60	-0.00	-0.08
はっきりした色の洋服を着るほうである	-0.35	0.06	0.43	-0.41	0.21	-0.06
ロングのフレアスカートをよく着る	0.07	0.19	0.08	0.00	-0.84	0.05
シンプルですっきりした洋服を着ることが多い	-0.26	-0.27	-0.08	-0.08	0.03	0.66
柔らかく優しい雰囲気の洋服を着ることが多い	0.13	0.36	0.11	0.05	-0.08	0.72
寄 与 率 (%)	14.55	11.22	9.80	6.03	5.45	5.35
累 積 寄 与 率 (%)	14.55	25.77	35.57	41.60	47.05	52.40

8 因子抽出され、累積寄与率は62.5%であった。抽出された因子負荷量をもとに因子の解釈を行った結果、第1因子はスポーティ因子、第2因子はドレッシィ因子、第3因子はスカート着用因子、第4因子は個性的因子と解釈した。5因子から8因子までは、項目数がすくないため因子としての解釈はできなかった。

さらに、因子分析で抽出された各因子ごとの因子得点から、各科コースの因子得点の平均値を求め、各科コースの特徴を検討した。この場合、第1因子と第4因子の因子負荷量が全てマイナスであり因子の解釈上反対の結果になるため、以後の考察時には第1と第4因子の得点平均値のプラスとマイナスを入れ換えた。その結果を図2に示す。

第1のスポーティ因子で平均値が高く表出したのは体育コース、養護コースであり、家庭コースと服飾コースが低く、第2のドレッシィ因子では体育コース、低いのは工芸科、第3のスカート着用因子では、服飾コースが高く表出、低いのは工芸科、第4因子の個性的な因子では工芸科と服飾コースが近い得点平均値で高かった。初等科は第5因子までマイナスであり第6因子でややプラス、経情科では因子5に対してプラスであった。

以上の結果から、体育コースはスポーティな洋服もドレッシィな洋服も着用している率が高

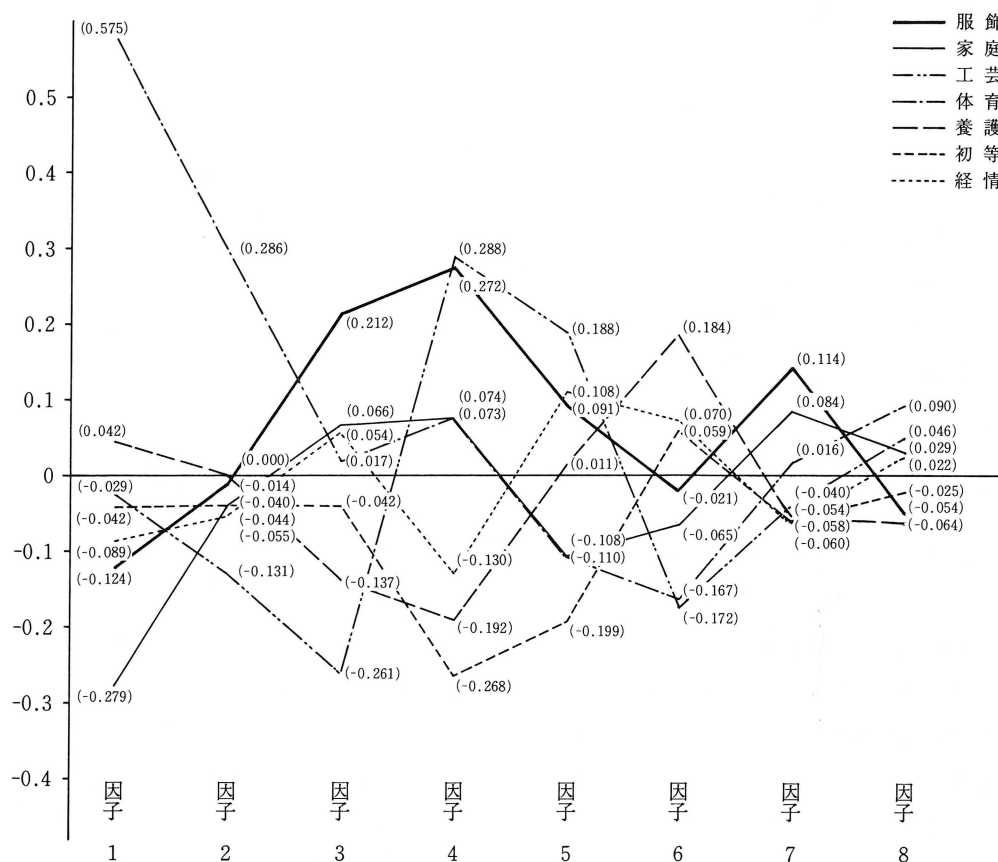


図2 日常着用している洋服の因子得点結果 (平均値)



い。工芸科はドレッシィな洋服とスカートはあまり着用せず、個性的な洋服を好む傾向にあった。服飾コースはスカートを着用しており個性的な洋服を好む傾向がみられ、家庭コースはスポーティな洋服はあまり着用せずやや個性的な洋服を着用している。養護コースは個性的な洋服は好まない傾向があり、因子6の柔らかく優しい雰囲気、シンプルな洋服を着用する傾向がみられる。初等科は個性的な洋服で高いマイナスであり、得点がプラスで表出したのは第6因子であった。初等科は個性的な洋服は好まず、優しい雰囲気、シンプルな洋服を着用する傾向、経情科は個性的な洋服は好まず、因子5のフレアースカートを着用する傾向にあった。

## 6. 日常着用している洋服と服装感との関連

つぎに着用している洋服の傾向と服装感との関連を考察するために、表7に示した服装の概念の項目全てに“あてはまる”とした人、すなわち概念に肯定でありその傾向の強い人を取り出した。また同調型の全質問項目に学生の半数が“あてはまらない”としたことにより、同調型全項目に対して、“あてはまらない”とした非同調の傾向の強い人も取り出し、主要4因子の因子得点の平均値を算出した。その結果を図3に示す。なお目だち型に“あてはまる”人は11名であり、人数が少ないために分析には使用できないと判断した。

因子1にたいして因子得点が高く表出した概念は堅実型、因子2にたいしては独自型、因子

3にたいしては流行型、因子4にたいしては独自型であった。それぞれの概念ごとに因子得点の平均値にt検定を行なった結果を表10に示すと、因子2、因子3、因子4の高得点者と低得点者間に危険率1%以上で有意差が認められた。因子2のドレッシィ因子では独自型が高く非同調型が低かった。独自傾向の強い人はドレッシィな洋服を着用する率が高く、非同調傾向の強い人はドレッシィな洋服を着用する率が低いと思われる。同様に因子3のスカート着用因子では流行型の人が高く表出、すなわち流行型の人にはスカートを着用する率が高く、堅実型の人、

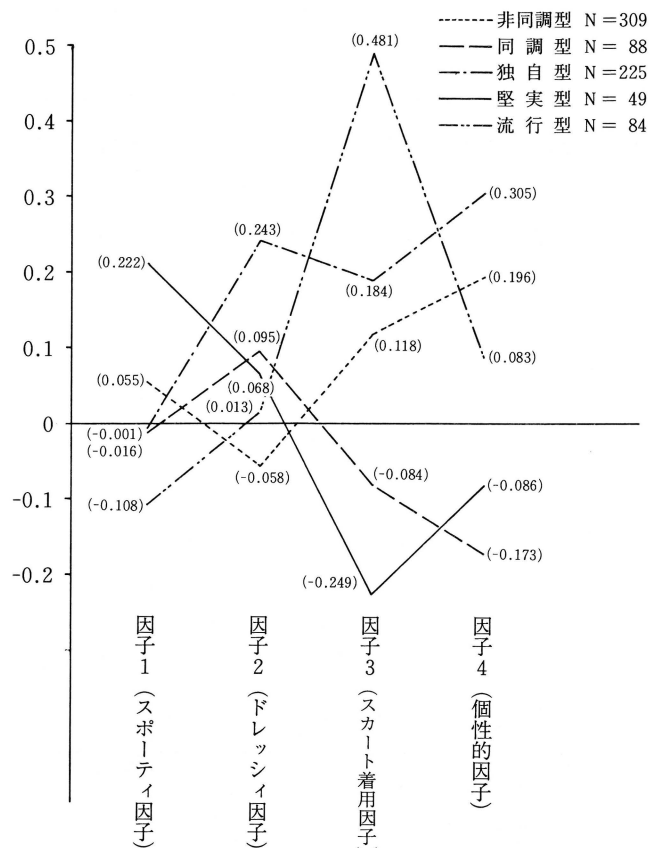


図3 服装感と着用実態との関連

表10 服装概念と着用実態との関連 (因子得点の平均値)

		非同調型	同調型	独自型	堅実型	流行型	平均値の差の検定結果 (t 値)
因子1	人数	309	88	225	49	84	
	得点平均値	0.055	-0.016	-0.001	0.222	-0.108	
	標準偏差	0.985	1.015	1.051	0.992	0.973	
因子2	人数	309	88	225	49	84	独自型
	得点平均値	-0.058	0.095	0.243	0.068	0.013	& 3.529**
	標準偏差	0.977	0.905	0.967	0.978	1.088	非同調型
因子3	人数	309	88	225	49	84	流行型
	得点平均値	0.118	-0.084	0.184	-0.249	0.481	流行型 & 4.162***
	標準偏差	1.004	1.050	1.075	0.920	1.044	堅実型 & 3.517**
因子4	人数	309	88	225	49	84	独自型
	得点平均値	0.196	-0.173	0.305	-0.086	0.083	& 3.853**
	標準偏差	1.035	0.918	1.130	1.093	1.099	同調型

\*\* p &lt; 0.01

\*\*\* p &lt; 0.001

同調型の人はスカートを着用する率が低いと思われる。また因子4の個性的な洋服では独自型の人が高く同調型の人が高いことから、独自型の人是个性的な洋服を着用する率が高く、同調型の人是个性的な洋服を着用する率は低いと思われる。さらに同調型と非同調型を比較した場合、非同調型の人も個性的な洋服を着用する率が多いと言える。

以上の結果から、服装にたいする概念が独自の人はドレッシィな洋服と個性的な洋服を着用する傾向にあり、同調的な人は個性的な洋服は着用しない傾向、非同調的な人はやや個性的な洋服を着用する傾向、また流行に肯定的な人はスカートを着用する率が高く、堅実的な人はスカートを着用する率が低いことがわかった。

## 7. 仕事に対する姿勢と服装感との関連

男女雇用均等法が実施される以前から、女性の社会進出は著しく増加しているが、社会に出て一歩手前の学生がどのように仕事を捉え、将来にたいするビジョンを持っているのか、働く目的と仕事にたいする姿勢について質問をした。なお仕事にたいする姿勢については、将来変わる可能性もあるが現在の自分の考えに近いものを選択してもらった。働く目的については2項目を、仕事にたいする姿勢については1項目をそれぞれ選択してもらい、その結果を表11、12に示す。

### (1) 働く目的と仕事にたいする姿勢について

働く目的として多く表出された質問項目は、経済的にゆとりのある生活をするためにが38.9%と一番多く、つぎは仕事をとうして自分の人格を成長させるために30.3%、仕事をとおして自分の能力を試すため22.7%であった。各科コースとも経済的にゆとりのある生活をするが多い。特に家庭コースが高く、低いのは初等科であった。働く目的で初等科が高く表出した項目は、仕事をとうして自分の人格を成長させるためであり、経情科も全体の平均率よりも高い。このように初等科の学生は経済的ゆとりよりも、自分の人格的成長を考えているのは、幼

表11 働く目的について

複数回答 (%)

項 目 / 各科コース	服 飾	家 庭	工 芸	体 育
経済的にゆとりのある生活をするため	149( 38.9)	135( 46.1)	85( 39.5)	110( 38.3)
社会的にえらくなるため	4( 1.0)	4( 1.4)	2( 0.9)	1( 0.3)
仕事をととして、自分の人格を成長させるため	98( 25.6)	88( 30.0)	52( 24.2)	87( 30.3)
企業の発展に尽くすため	6( 1.6)	2( 0.7)	2( 0.9)	0( 0)
仕事をととして、自分の能力を試すため	112( 29.2)	50( 17.1)	66( 30.7)	74( 25.8)
人に尽すため	3( 0.8)	2( 0.7)	2( 0.9)	5( 1.7)
社会貢献するため	6( 1.6)	8( 2.7)	3( 1.4)	9( 3.1)
その他	5( 1.3)	4( 1.7)	3( 1.4)	1( 0.3)
計	383(100.0)	293(100.0)	215(100.0)	287(100.0)
項 目 / 各科コース	養 護	初 等	経 情	合 計
経済的にゆとりのある生活をするため	148( 37.0)	97( 32.8)	160( 39.8)	884( 38.9)
社会的にえらくなるため	0( 0)	2( 0.7)	1( 0.2)	14( 0.6)
仕事をととして、自分の人格を成長させるため	116( 29.0)	110( 37.3)	138( 34.3)	689( 30.3)
企業の発展に尽くすため	0( 0)	0( 0)	0( 0)	10( 0.4)
仕事をととして、自分の能力を試すため	82( 20.5)	53( 18.0)	79( 19.7)	516( 22.7)
人に尽すため	33( 8.2)	15( 5.1)	2( 0.5)	62( 2.7)
社会貢献するため	17( 4.3)	18( 6.1)	18( 4.5)	79( 3.5)
その他	4( 1.0)	0( 0)	4( 1.0)	21( 0.9)
計	400(100.0)	295(100.0)	402(100.0)	2,275(100.0)

表12 仕事にたいする姿勢

(% )

項 目 / 各科コース	服飾 N=201	家庭 N=157	工芸 N=118	体育 N=155	養護 N=210	初等 N=156	経情 N=211	合計
仕事は一生続ける	29 (14.4)	17 (10.8)	37 (31.4)	30 (19.4)	44 (21.0)	31 (19.9)	27 (12.8)	215 (17.8)
仕事は結婚までの一時的なもので よい	34 (16.9)	34 (21.7)	14 (11.9)	12 ( 7.7)	8 ( 3.8)	8 ( 5.1)	23 (10.9)	133 (11.0)
子供が生まれたら仕事はやめる	39 (19.4)	35 (22.3)	16 (13.6)	30 (19.4)	30 (13.9)	30 (19.2)	47 (22.3)	227 (18.8)
子供に手がかからなくなったら再 び仕事をする	95 (47.3)	71 (45.2)	49 (41.5)	81 (52.3)	126 (60.0)	85 (54.5)	110 (52.1)	617 (51.1)
その他 (	4 ( 2.0)	0 ( 0)	2 ( 1.7)	2 ( 1.3)	2 ( 1.0)	2 ( 1.3)	4 ( 1.9)	16 ( 1.4)
計	201	157	118	155	210	156	211	1,208

児教育と児童教育に携わる目的学科であり、子供の教育と成長に自分が関与していくことと関連があるように思われる。つぎに仕事をととして自分の能力を試すための項目に全体の平均率よりも高く表出したのは、服飾コースと工芸科であった。これは服飾コース、工芸科共に造形による自己表現を専門とする学科であるため、自分の能力を試したいと考えているものと推察する。

つぎに、仕事にたいする姿勢についての質問では、子供に手がかからなくなったら再就職をするが半数以上、仕事は一生続けると子供が生まれたら仕事をやめるがほぼ同数、仕事は結婚までの一時的なものでよいとした学生は11%であった。次代を担う学生達は、子供の教育期間

中は一時家庭に入ることを望みながらも、社会にでて働くことが当たり前になってきていることが推察される。

また各科コースごとの相違をみると、仕事を一生続ける、子供に手がかからなくなったら再び仕事をするを合わせると養護コースは81%，初等科は74.4%とキャリア志向がみられた。これは養護教諭，幼稚園教諭，小学校教諭になるための目的学科であり，すなわち専門職であることに起因しており，工芸科も72%と多いのは，専門が個人の意志で続けていくことが出来るためであろうと思われる。仕事を結婚や子供が生まれたらやめたいとしているのは服飾コース36.3%，家庭コース44%，経情科の32.3%である。これにたいして，工芸科は25.4%，体育コース27.1%，養護コース17.7%，初等科24.3%とやや少なくなっている。服飾コース，家庭コース，経情科にキャリア志向が弱く表出した。このように女性の社会進出が目ざましい中にも，従来の良妻賢母型を望む学生の存在は認められた。

## (2) 仕事にたいする姿勢と服装についての関連

“服装によりその人柄が判断される”，あるいは“服装にその人なりが現れる”など服装はしばしばその人の印象形成や自己表現の手段として用いられるものであるが，仕事にたいする意識の違いがどの程度服装に現れるものなのか，どうかを探る目的で，仕事にたいする姿勢と日常着用している洋服との関連を検討した。そのため仕事にたいする姿勢の質問項目でキャリア志向とそうでない人，すなわち仕事を一生続けたいとした人215名と，結婚までの一時的なものでよいとした人133名を取り出し，日常着用している洋服で抽出された各因子の因子得点の平均値をもとめ，t検定をおこなった。結果を表13に示す。スポーティ因子，スカート着用因子，個性的因子に危険率5%で有意差が認められた。仕事を一生続けるとした人は，第4因子である個性的因子の得点が高く表出し，第3因子であるスカート着用因子の因子得点はマイナスであった。一方仕事を結婚までの一時的とした人は，スポーティ因子と個性的因子がマイナス，特にスポーティ因子は高いマイナスであった。これらのことから，仕事を一生続けるとしたキャリア志向の人は，そうではない人と比較した場合，スカートはあまり着用せず，スポーティな洋服を着用する率が高く，特に個性的な洋服を好む傾向がみられた。これにたいし，仕事を結婚までの一時的としたキャリア志向の弱い人はスカートを着用する率が高く，個性的な洋服は好みではなく，スポーティな洋服もあまり着用しないことが判明した。

表13 仕事にたいする姿勢と日常着用している洋服との関連

	人数	第1因子		第2因子		第3因子		第4因子	
		平均値	S D	平均値	S D	平均値	S D	平均値	S D
仕事は一生続ける	215	0.156	1.035	-0.047	1.054	-0.181	1.039	0.264	1.149
仕事は結婚までの一時的なもの	133	-0.311	1.116	0.025	0.975	0.072	0.974	-0.089	0.809
t 値		3.886**		—		2.288*		3.318**	

\*  $p < 0.05$

\*\*  $p < 0.01$

さらにこの2者間に服装感の相違が認められるかどうかを検討する目的で、2件法で回答された服装感を採る質問項目を各概念ごとに分け平均度数を算出した。なお堅実型の質問項目の、洋服を購入するときよいと思ったらすぐ買う、の項目については平均度数の算出時に“あてはまる”と“あてはまらない”を入れ換えた。平均度数の $\chi^2$ 検定を行なったところ危険率0.1%で有意差が認められた。その結果を表14に示す。2者とも流行型に“あてはまらない”非流行型であった。つぎに多い服装概念は、仕事を一生続けるとしたキャリア志向の人で、半数以上“あてはまらない”とした非同調型、非堅実型であった。一方仕事を結婚までとしたキャリア志向の弱い人は堅実型と同調型に否定的、すなわち非堅実型であり、非同調型であった。2者間で相違があった肯定的な概念は同調型で、キャリア志向の低い人の方が同調的であった。

表14 仕事にたいする姿勢と服装感との関連

(%)

	質 問 項 目	仕事は一生続ける		仕事は結婚までの一時的なものでよい	
		1.あてはまる	2.あてはまらない	1.あてはまる	2.あてはまらない
同調型	周囲の人と同じ服装をしていると落ち着く	87(40.5)	128(59.5)	54(40.6)	79(59.4)
	自分の好みではなくても、他人にほめられたら着る	70(32.6)	145(67.4)	52(39.1)	81(60.9)
	友達が着ている洋服と同じようなものが欲しくなる	68(31.6)	147(68.4)	54(40.6)	79(59.4)
	洋服を購入するとき友人や店員に進められると、その気になって買う	66(30.7)	149(69.3)	58(43.6)	75(56.4)
	平 均 度 数	72.8(33.8)	142.3(66.2)	54.5(41.0)	78.5(59.0)
独自型	購入しても多くの人が着ているのがわかると、着るのが嫌になる	119(55.3)	96(44.9)	80(60.6)	53(40.3)
	今までに誰も着用したことのない洋服を着たい	90(42.1)	125(58.1)	52(39.1)	81(60.9)
	洋服を購入するときは、他人が着ていないものを選ぶ	99(46.3)	116(54.2)	61(45.9)	72(54.5)
	平 均 度 数	102.7(47.8)	112.3(52.2)	64.3(48.3)	68.7(51.6)
堅実型	洋服を購入するとき良いと思ったらすぐ買う	95(44.2)	120(56.0)	48(36.1)	85(64.2)
	ブランド商品はぜいたくだと思う	104(48.4)	111(51.9)	55(41.4)	78(59.0)
	服装にお金をかけることは無駄なことだと思う	28(13.3)	187(87.0)	7( 5.3)	126(94.7)
	平 均 度 数	84.0(39.0)	131(60.9)	49(36.8)	84(63.2)
流行型	流行の服は真っ先に取り入れる	26(12.1)	489(87.9)	22(17.1)	111(83.5)
	ブランドやメーカーにこだわるほうである	47(21.9)	168(78.1)	40(30.1)	93(69.9)
	平 均 度 数	36.5(17.0)	178.5(83.0)	23.3(17.5)	102(76.7)

$$\chi^2=74.8908$$

$$p < 0.001$$

以上の結果から、仕事を一生続けるとしたキャリア志向の人は、スポーティな洋服を着用する率が高く、個性的な洋服を好み、服装感是非流行・非同調的な傾向であった。これにたいし、仕事を結婚までの一時的でよいとしたキャリア志向の弱い人は、個性的な洋服、スポーティな洋服はあまり着用せずにスカートを着用する率が高く、服装感是非流行・非堅実的な傾向が認められた。

## Ⅳ 要 約

入学式の式服についての実態，日常着用している洋服と服装感との関連，および仕事に対する姿勢と服装との関連を検討した結果，つぎのことが明らかになった。

- ① 式服のイメージ測定から，上品な因子，落ち着き性の因子，フォーマル性の因子，平凡な因子，慣習的な因子が抽出され，式服は上品で落ち着き，フォーマル性があり慣習的でやや平凡なイメージがあることが判明した。また体育コースの学生はスポーティで活動的な雰囲気 of 式服を着用していた。
- ② 式服の着用実態から，入学式でみられた平均的な着想像はつぎのようになった。髪型はセミロング，イヤリングをつけ，顔立ちは卵型，着用していた服種は紺色のスーツが多く，その平均購入額は35,500円，バッグは茶色で平均購入額13,400円，靴は黒で8,200円であった。さらに学生に好まれる洋服の色は黒，白，紺，の順であり，最近の傾向として黒，白は若年層に好まれる色であることがわかった。
- ③ 服装感を探る質問項目24項目を2件法で回答してもらった結果から，質問項目を同調型，独自型，目だち型，堅実型，流行型，購入態度に概念分けをして考察した。その結果，入学生の服装感は非同調的，非流行的な傾向であり，購入態度から合理的な衣生活を心がけ，自分なりの着用方法を身につけており，個性化現象に動いていることが推察された。また各コースごとの特徴として，服飾コースは非同調・独自の傾向，工芸科は独自の傾向，養護コース，初等科は非独自の傾向，経情科は非同調・非流行的な傾向があった。
- ④ 日常よく着用する服装についての質問22項目を因子分析した結果，スポーティ因子，ドレッシィ因子，スカート着用因子，個性的な因子が抽出された。さらに抽出された各因子ごとの因子得点の平均値から，体育コースはスポーティな洋服もドレッシィな洋服も着用する率が高いことが分かった。工芸科は個性的な洋服を好む傾向，服飾コースはスカートを着用しており個性的な洋服を好む傾向，家庭コースはスポーティな洋服はあまり着用せず，やや個性的な洋服を好む傾向があった。養護コース，初等科は個性的な洋服を好まず，柔らかく優しい雰囲気，シンプルな洋服を着用する傾向，経情科は個性的な洋服は好まず，フレアースカートを着用する傾向にあった。
- ⑤ 日常着用している洋服と服装感との関連では，服装に対する概念の傾向の強い人を取り出し，主要4因子の因子得点の平均値を算出し，それぞれの因子の高得点者と低得点者間で平均値の差の検定を行った。その結果から，服装に対する概念が独自の人はドレッシィな洋服と個性的な洋服を着用する傾向にあった。また同調的な人は個性的な洋服は着用しない傾向，非同調的な人はやや個性的な洋服を着用する傾向がみられた。さらに流行に肯定的な人はスカートを着用する率が高く，堅実的な人はスカートを着用する率が低いことがわかった。
- ⑥ 働く目的を2項目選択してもらった結果，経済的にゆとりのある生活をするため

38.9%，仕事をとうして自分の人格を成長させるために30.3%，仕事をとうして自分の能力を試すために22.7%であった。科コースごとの特徴では，初等科が仕事をとうして自分の人格を成長させるために多く，経情科も全体の平均率より高かった。服飾コース，工芸科は自分の能力を試すためにが全体の平均値よりも高く表出した。

また仕事にたいする姿勢では，子供の教育に手がかからなくなったら再就職をするとした学生が半数以上，社会に出て働くことが当たり前になってきていることが推察された。各科コースごとの特徴として，養護コース，初等科にキャリア志向がみられ，服飾コース，家庭コース，経情科はキャリア志向が弱かった。

⑦ 仕事にたいする姿勢と服装との関連では，キャリア志向のある人とそうでない人を取り出し，日常着用している洋服と服装感の相違を検討した。平均値と度数の差の検定結果から，仕事を一生続けるとしたキャリア志向の人はスカートはあまり着用せず，スポーティな洋服を着用する率が高く，個性的な洋服を好み，服装感是非流行・非同調的な傾向があった。一方仕事を結婚までの一時的なものでよいとしたキャリア志向の弱い人は，スカートを着用する率が高く，スポーティな洋服，個性的な洋服はあまり着用せず，服装感是非流行・非堅実的な傾向が認められた。

#### 付記

この調査研究は北海道女子短期大学創立30周年を記念して，企画された共通テーマ「'93入学者の調査研究」の一部として報告するものである。調査にあたり協力して頂いた学生，ならびに統計について御助言を頂いた共立女子大学の小林茂雄氏，その他，各関係の方々に感謝致します。

### 参 考 文 献

- 1) 佐野千佐他：北海道女子短大1983年入学者の服装に関する調査，北海道女子短大研究紀要，第17号，P. 1-16，1983
- 2) 朝日新聞社編：'92民力，朝日新聞社，P. 560，1992
- 3) 富家直：二色配色の評価と単色の評価との関係，色彩研究，21 P. 19-22，1974
- 4) 近江源太郎：配色における調和感と他の評価との関係，色彩研究，21，P. 23-27，1974
- 5) 熊本日日新聞：平成元年10月4日掲載
- 6) 多久慶子他：女子学生の被服行動（第三報），尚絅短期大学研究紀要，第22号，P. 17-25，1990
- 7) 高岡朋子他：女子学生の着替えに伴う心理的な効果についての調査研究，日本繊維機械学会，第45巻，第6号，P. 59-68，1992
- 8) 城一夫：ファッションの成立事情，被服心理学夏期セミナーテキスト，日本家政学会被服心理学部会編，P. 1-9，1993
- 9) 神山進：衣服と装身の心理学，関西衣生活研究会，P. 114，1990